〈講　演〉

河上 肇の文化経済学志向

――『貧乏物語』を中心として――

池　上　　惇

本報告では，河上の『貧乏物語』を彼の経済学の原点におく。『貧乏物語』の経済学はラスキンの文化経済学であり，各国や地域の個性や文化的な価値を視野に入れた比較経済学の視野と，資本蓄積や貧困化に関する経済法則の視野を併せ持っていた。

同時に，彼は櫛田民蔵の批判を受け容れて文化的価値を重視するラスキン経済学を手放し，『貧乏物語』を絶版にして教育人から政治人へと変化した。

にもかかわらず，河上は，このことによって，分析的な方法による経済法則の解明に集中し，経済学の研究の幅を広げる。

そして，河上が再び教育人に立ち戻ったとき，かかる経済法則の研究成果を基礎に，ラスキンの提起した視野を比較経済学によって深めてゆく。死の直前，彼は，『小国寡民』において，ロシアのコーカサス地方を取り上げて，イギリス，中国，ドイツ，ロシアのなかに確認しうる「真理」として田園都市社会主義に到達した。

河上肇は，求道者，宗教的原理の追求者，マルクス主義者，旅人など多様な特徴づけを与えられてきた。これらは，それぞれに価値のある河上肇論である。同時に，彼の自己評価は「真理を求める柔軟な心の持ち主」であった。これは本質的には科学者というべき自己評価である。本報告は，『貧乏物語』における河上の文化経済学志向を手がかりとして，彼の科学者としての真髄を明らかにし，現代経済学者としての先駆性を明らかにした。

その意味では，河上肇の著作は，『貧乏物語』『資本主義経済学の史的発展』

『資本論入門』『自叙伝』など，現代経済学の古典として今尚価値の高い著作物である。

そして，このような『貧乏物語』から経済学研究の結果，彼は，巧まずして，教育人としての人生を全うしたのであり，彼の人生は「高い教育的価値」という固有の価値を持つに至った。政治よりも教育を重視したラスキンの社会改革思想は河上の著作物と河上自身の人生そのものにおいて日本の風土に結実したというべきであろう。

I　はじめに――『貧乏物語』の思想的背景と実証的研究

河上肇の『貧乏物語』における理論的な核心は，下編十の一に示されている。

「現代経済組織の下に於いて個人主義の齎せし最大弊害は，多数人の貧困である。……社会には依然として貧富も懸隔を存し，富者は只その余裕あるに任せて種々の奢侈贅沢品を需要し行く限り，到底この社会より貧乏の根絶するの望みなきが故に，遂に経済組織改造の論出づるに至る。」[1)]

そこで，『貧乏物語』では，貧乏克服のための社会改革に当たり，産業国有化などの制度改造によるべきか，それとも，人心の改造によるべきか，が，問われている。そして，河上は『貧乏物語』では後者を選択し，後には，櫛田民蔵のラスキン批判を受け入れて K. マルクスの制度改造論に転じた。しかし，河上は杉原四郎教授の研究によれば，死の直前に記した草稿のなかで，ほぼ，ラスキンやモリスが描き出した社会像をソ連の一地方であったコーカサスの地域社会を借りて描き出した。河上は，人心改造論から出て制度改造論に至り，それを踏まえつつ再び人心改造論者の世界に立ち返ったのであろうか。

経済学の発展史から考察すると，人心改造論の開発した経済学は「文化経済学」である。そして，制度改造論を提起し展開したのは，空想的社会主義から科学的社会主義に至る「社会主義政治経済学」であった。

---

1)　河上肇『貧乏物語』弘文堂，1917（大正6）年（末川博監修『河上肇全集』第9巻，岩波書店，1982年，79ページ）。

人心改造論を主張した文化経済学や，その原典にあるラスキンの芸術経済学は，政治よりも教育を重視し市場経済を前提としつつ公共活動によって市場を制御しつつ，文化的な価値を金銭的価値の上位に置くという社会的合意を重視する。そして，この合意の下で，公私総ての家計・管理・経営に人間性の開花と創造性の実現を求め，倫理と規範，ルールに支持された社会改革を実行しようとするのである。この社会改革は経営の担い手が社会的な教育によって文化的価値を理解し実行することを推進力としているから，経営組織が社会や労働者の意向から独立して暴走することはあり得ない。

同時に大きな難点として科学的社会主義から指摘されているのは，経済力格差のある階級の利害が対立し労使の対立が生存競争として相手の存立基盤を脅かしたとき，権力や勢力を行使することなく平和的に社会的合意が成立し「経済力あるもの」が自らその力を放棄して利害の対立する階級や個人に所得や資源を配分しうるのか，という点である。

この疑問に対して文化経済学者は社会が進歩し生産力が向上するに連れて「創造性」や「文化性」が経営者や権力者に及ぼす影響が大きくなり，芸術・学術・職人性などを無視すれば経営は競争力を失い，政治は合意形成力を喪失する，と考える。そして，学術や芸術の創りだす構想力は「文化的価値を認識した人々による産業実験や非営利組織・公共部門における実験」を通じて人々の創造力や教育力を高める。これらの創造的成果が私企業の経営に広がり社会改革の動きが全社会に広がってゆく，と考えていた。

これに対して，社会主義政治経済学の究極の成果であるK．マルクス「科学としての経済学」は教育よりも政治を重視し市場経済を超える国家的計画経済によって社会の生産力を利潤動機から解放し，その成果を平等に分配して高次元の共同社会を実現しようとする。

現在では，政治や国家組織に権力が集中する社会改革はロシア革命の事例を研究する人々によって，その功罪が示されてきた。かかる改革はとりわけ後進資本主義国や低開発国の場合，重工業の生産力を解放するという点では瞬発力

効果は期待できる。また，政治・行政・経済の権力が集中しているから戦時経済への転換も迅速で戦争への適応性は高い。しかし，巨大な官僚組織を特徴とする限りは，情報の集中と学術・芸術への統制力が極端に強まる。このために，平等という社会的価値の追求とは反対の方向に社会が動く。社会主義国には本来形容矛盾であるはずの特権階級が形成されて不平等，不公正，さらには，不自由な市民生活を生み出すに至る[2)]。

ラスキンが芸術経済学を提起した当時は19世紀の後半であるから，このような実証的研究はもとより不可能であったが，彼は，当時のイギリスの経済組織を観察して金銭的な価値には敏感であるが教養や教育のない人々が社会，経済や経営の権力を握ったとしても，創造的なアイディアと高い人格による社会の運営は不可能であると考えていた。長らく非人間的な支配のもとで働く習慣が身につき，低所得の中で生きるために金銭を獲得するという姿勢で働く習慣を身につけているならば，その習慣のままで力を結集して権力をもったとしても，結局は，金銭至上主義の管理を引き継ぐだけではないのか，というのである。

労働者に創造性がなければ社会の経営は成り立たない。ラスキンによれば，この創造性は自然や社会から学ぶ力量にも通じていて，経営の要素となる，大気，水，土地，労働なども，自然や社会から「信託されたもの」に過ぎないことを知らねばならない。労働者は経営者とともに，学術・芸術の専門家となるよう努力し，多数の専門家の支援も得て自らを教育しよう。そして，文化的価値を理解し，彼らの労働を創造的で芸術的なものに転換しよう。労働の報酬は金銭ではなくて人間としての生きがいある人生である。これこそが社会改革の推進であり前提であると言うのであった。そして，このような場を労働者は協同組合をつくり，自治体や政府のなかで「創造的な営み」を実験し，その成果や経験を私企業や経営に広めてゆく。ある意味で，公共活動によって人心改造

2)　ロシア革命においても革命当初は個人累進所得税制度など社会的公正を実現しうる制度が導入されたが，国有化や電化の過程で一党独裁の政治権力が強化され個人所得税は廃止されて国有企業の売上高に課税する一種の間接税が中心となった。国家権力から自立した市民の世論形成力や教育力は後退し言論や思想までが統制される。

のモデルを提供し私的企業などにも導入し普及すればよいと考えたのであった。

河上が『貧乏物語』で論じようとした「人心の改造」とは，ラスキンによれば，このような内容を持つものであったのである。そして，このようなモデルは19世紀後半のイギリス社会において不十分ながら受容されうる，現実的な案であった[3)]。

II 未来社会の構想——ラスキンと河上肇

浦口文治教授は，1925年に，ラスキンやモリスの社会改革構想を次のように総括されていた。

「彼らの好んで想像した将来の労働者階級は智慮あり芸術趣味ある手工業者の一団体であった。其住へる小奇麗なガシック式の小住宅を囲んだのは各自の庭園であった。これらの住宅が英国内一面に散らばって茲に出来たのが田園的村落であった。また，これらの労働者が皆満悦して各々従事したのは日曜の物品—家具類，道具類，毛織物等を丈夫に且美麗にこしらへる事であった。」[4)]

この構想を，杉原四郎教授が『旅人　河上肇』（岩波書店，1996年）で示された，河上肇のそれと比較してみよう。

「河上肇が病没する5ヶ月程まえに書いた「小国寡民」と題する随想がある[5)]。

陸放翁や老子にことよせて晩年の心境を述べたもので清泉の迸りでる広々とした土地に一面の草花を植え，その一隅に小庵を建ててそこに住みたいというのが自分の空想であるという。

話はそこからソ連の一部になっているコーカサスに移る。自分が日本の

3) 浦口文治教授は，1925（大正14）年に公刊された『ジアン・ラスキン』同文館において，社会改革は「『権力によりて，はた勢力によりて強行さるべきものではなく』（旧約聖書より一引用者）して，むしろ一新された動機即ち社会的正直心（social honesty）を通じての主張であった。」浦口文治教授『ジアン・ラスキン』同文館，1925（大正14）年，420ページ。

4) 浦口文治『ジアン・ラスキン』同文館，1925（大正14）年，406-407ページ。

5) 『自叙伝』（五），岩波文庫（全集続7），杉原四郎編『河上肇評論集』岩波文庫，1987年。

本土と広さは同じだが人口は十分の一のこの地にあこがれるのは，第一に，風景絶景で，第二に風俗習慣を異にする他人種が住んでおり，第三に山間の各所から温泉が湧き出しているからだ。自分は小庵に住むのを好むように，侵略主義的大国の一員たるより，このような小国に無名の一両民として住めるなら，『人生の清福これに越すものはなかろう』[6]。

確かに，この指摘は1917年のロシア革命後，著作物を通じて普及されたソ連のイメージとは全く異質なものである。杉原教授によれば，ここでは，「計画経済の全国的運営や『電化』で象徴される近代的生産力の発展の側面」[7] は，まったく触れられていない。当時の計画経済論は「社会主義プラス電化」「科学的管理法からの学習」など，高度資本主義の実現した生産力や技術の成果を高く評する傾向が強かった。大規模な生産設備や鉄道網・発電所などの建設に注目が集まっていたからである。

ここで，河上が描いている社会主義像は，ロシアのものであるよりは，むしろ，イギリス的で，W. モリスの『ユートピアだより』(1891年)，E. ハワードの『明日の田園都市』(1902年) などが示唆した都市社会主義社会のイメージに近いものであった。これらの都市社会主議論は，国家と個人という市民革命来の対比や緊張関係に対して地方分権下におけるコミュニティと個人の緊張関係を重視し，「社会主義から共同の努力と自治体生活という生気に溢れた概念を，また“個人主義”からは，独立自尊と自己信頼の保存を借りたのである」[8]

これらの理論は，土地や施設の公有化を特徴とし，市場経済のもとでの個人の経済的，政治的な自立を尊重する。日本農業論などの厚みのある研究成果をもつ，河上が土地公有に関する広い視野を持っていたことは確かであるから，杉原教授が「河上はこの文章で，『すべての温泉上は，以前のツアーの離宮や貴族たちの別荘とともに今ではみな民衆のものとなっている』と述べてコーカ

6)　杉原四郎『旅人　河上肇』岩波書店，1996年，14ページ。
7)　同上書，14ページ。
8)　竹内光博『都市モデル論序説』日本経済評論社，2007年，126ページ。

サスの社会体制の特色を指摘している」ことを強調されているのは，当然であろう。

杉原教授がここで注目しておられるのは，以下の諸点である。

「㈠ 住民は新鮮な果物や，健康によい温泉に恵まれた風景絶景の自然と共生していること，

㈡ 各自の独特な風俗習慣を持っているさまざまな人種の共存が住民の生活を豊かなものにしていること，

㈢ 老子のいわゆる『その食を甘しとし，その服を美しとし，その居に安んじ，その俗を楽しむ』という住民の生活態度こそ『人生の清福』を支える根本だという諸点である。」[9]

ここに見られる河上肇の価値観は，ラスキンの指摘と共通する，ある種の審美的な価値観であると言ってもよい。

そこには，文化の交流のような多様な価値観の共存がある。これは文化的な価値と言えるものであって，この価値観の基礎には，この「生活」が人間や自然のもつ美しさを反映していること，多様な個性的なものが響きあい，対立し共感しあって調和や不調和をつくりだしていること，などの事実がある。また，伝統的に受け入れられてきた表現の形式（例えば，古典）や，現代的な生活や自然の変化を受容した表現の形式，簡素で美しい形式などにもつながる価値観であろう。

III 比較経済学の方法

先に引用した河上の「小国寡民」はコーカサスのことを論じながら，同時に，中国の思想を論じている。この方法は，彼の生涯を通じて一貫したものであった。例えば，『貧乏物語』では，国や地域にとしては全く異なり，固有の歴史を持つ，イギリスの現状や思想や政策と，中国の地域のそれとを比較し，そのなかから‘共通のもの’を確認して，これを真理とする方法である。

9) 杉原四郎『旅人 河上肇』岩波書店，1996年，14-15ページ。

河上の方法と類似の方法は，ラスキンの著作においても，しばしば観察しうる。例えば，ラスキンの代表的著作『ヴェネツィアの石』は，冒頭で，イギリスとヴェネツィアを比較して，次のように言う。

「人類が海に乗り出して支配権を確立して以来，際立った三つの王国が誕生した。海洋国家チュロスとヴェネツィアとイギリスである。最初の国チュロスは記憶に僅かにとどめられているだけである。二番目の国ヴェネツィアは，いまや廃墟となりかけている。三番目の国イギリスは，前の二国の偉大さを継承しているが，亡国となった二国の歩んだ没落の轍を踏むなら，高慢と驕りにおぼれて，顧みられずに没落するかもしれない。」[10]

いくつかの国や地域社会を比較検討しながら差異と共通性を発見し，真実を確定する，このような社会科学方法論は，各国民の個性や文化的価値を解明する上で大きな役割を果たした。社会科学においては，自然科学と異なり個性の解明という大きな課題に直面する。このために，「社会を比較する」なかで，文化的な差異や個性を解明するとともに，異なる言語で表現された歴史や習慣の記述を翻訳して共通性を発見し，社会科学における普遍的な法則性を見出すことも重要な課題となる。経済学の分野においては比較経済学の方法といえるであろう。

自然科学の方法は，デカルトが開拓したもので，彼は対象を分析していくつかの要素に分解し，これらを総合して結論をだす方法を科学的な真理を発見する方法として普及させた。

これに対する反論は，G. ヴィーコをはじめとするイタリアの社会学者によって行われた。その理由は，デカルトの方法では，研究対象が人間の外にあって，客観的な分析が可能な自然科学においては妥当する。しかし，人間が「研究対象の内部」にいて個性や多様性を前提として研究対象を観察しなければならない社会科学の場合には，人間の主観や価値観が観察や分析に大きな影

10)　ジョン・ラスキン，内藤史朗訳『ヴェネツィアの石―建築・装飾とゴシック精神』法藏館，2006年，3ページ。

響を与える。とくに，生まれた地域や住んでいる地域が違えば，言語や習慣が違うのだから，同じことを観察しても意味づけや，位置づけには大きな差異が出る。そこで，この差異を踏まえて共通する真理を発見するには，各国や各地域で「発見された真理」であっても，そこには，いくばくかの「神話性」が含まれていることを自覚し，「真理らしいもの」を各国語に翻訳して他の国に類似の「真理」が発見できれば，この発見は「真理により近づく」ことになる。この方法では，真理の相対性を絶えず意識しながら，より，長期的に，より広範囲に研究を進めて比較が出来れば出来るほど，それは真理に無限に接近してゆくのである。ヴィーコは例として「ことわざ」は各国に共通したものがあり，翻訳が進めば「真理」として確認できると指摘している。

河上はヴィーコを研究した形跡はない。しかし，彼は，ラスキンを研究し，個性や「固有のもの」が存在することを認識していた。そして，彼が得意とした多様な言語を深く理解する中で，比較社会学に類似の，独自の方法を開発し「真理」に近づいていったのである。

他方で，科学的経済学の方法は，デカルト的な分析手法を徹底させた。例えば，K. マルクスの『資本論』は，価値法則から始まって分業や協業，機械制大工業などの法則を論じ，資本蓄積法則や再生産の法則，平均利潤率の成立の法則や，価格法則，商業利潤の法則，地代の法則など，圧倒的な分析の成果を残している。

しかし，科学的経済学は，個性や文化的な価値，さらには，創造性などの問題に立ちいることは困難であった。

これに対して，『貧乏物語』から『小国寡民』に至る河上の歩みは，最後までラスキンの構想にこだわり，デカルトよりもヴィーコに近い社会科学の方法を持続している。このことは，マルクスの経済学の段階では，まだ，未開発であった社会科学の方法を河上が開発していたこと，を示している。

河上は櫛田民蔵の批判を受容して『貧乏物語』を絶版にして，ラスキンと決別した姿勢をとり，人心改造論を捨てて制度改造論に踏み切り，教育者として

の立場を停止して政治への道を歩んだ。そして，そのなかで，デカルト的な分析的方法論を用いて科学的経済学を研究し，一旦は，マルクス主義の発見した真理，資本論の厳密な分析的な研究や，ロシア革命という「真理」への傾倒があった。このなかで，河上は科学的経済学の方法や法則を発見する力量を高めたのである。

河上は，分析的な方法による科学的な真理の発見に努めたが，ここで，発見された法則の中に「神話性」が含まれうる，との認識を持っていたかどうかは不明である。しかし，「地域比較の中から確認できる真理」に最後までこだわることによって，当時の通説的なソ連社会理解を遥かに超え，その意味で，「レーニンのロシア革命」をも相対化しえた強靭な科学性こそ，注目される。この成果は，彼自身が自叙伝で言う「真理を求める柔軟な心」を持ち続けえたことを証明するものであろう。

IV　全人の視野から見た経済法則

1　美・知・徳と経済の関係性

河上肇が『貧乏物語』を公刊したのは1917（大正6）年であった。まさに，激変の時代である。第一次世界大戦，ロシア革命，そして，日本では米騒動が農村から都市を揺るがした。この時期，河上は，A. スミスの「資本主義経済学」，J. ラスキンの「人道主義経済学」，K. マルクスの「社会主義経済学」を研究し，人道主義経済学に注目していた。

それは，『貧乏物語』の序文に掲げられた，ラスキンの「この最後のものにも」における，次の一文の引用に象徴されている。

There is no wealth but life.

河上は，この一文に対して「富何物ぞ只生活あるのみ」の訳語を宛てた。そして，「富なるものは人生の目的――道を聞くという人生唯一の目的，只その目的を達するための手段としてのみ意義あるに過ぎない。而して余が人類社会

より貧乏を退治せんことを希望するも，只貧乏なるものが此の如く人の道を聞くの妨げと為るが為のみである。」[11)]

また，彼が理論的にみて最も参考にしたのは，イギリスの研究者による社会の大病としての貧困認識であった。『貧乏物語』で，河上が実証的な素材として活用しているのは，ラスキンの後継者のひとり，ローントリーであった。しかも，河上は，ラスキンの主張を孔子の言，「朝に道を聞かば夕に死すとも可なり」との指摘を同様の意味をもつものとして位置付けている。

したがって，『貧乏物語』の主題は，道を聞く，すなわち，ラスキン流に表現すれば，「美と知を楽しみ徳を尊ぶ人生あるいは生き方」を開化させるために，貧乏を退治して健康で希望のある人生を総てのひとびとにもたらすことであった。そして，「道を支える経済」の内容を解明するには，中国やイギリスなどの経済思想を比較し，河上の翻訳力を用いて両者の共通性を発見する，という方法を採用した。

この方法は，「道」を求める人間の全人格的な把握を前提とするから，経済学で言う「経済人」「合理的人間あるいは階級的人間」の仮定はおかれていない。従って，経済法則を解明する場合にも，「経済人の契約行為」だけを純粋化し，分析的に解明する方法を採らない。むしろ，採用されている方法は，人類社会や，一国社会や，地域社会などの「社会」を前提とし，経済契約が成立する前提条件を視野にいれた総合的な方法である。さらには，総合的な方法によって把握された経済契約を「道」実現の手段として位置づける行為の存在を国別の思想などを手がかりに，「共通のもの」の存在を発見して，それを真理として確定する。

当時の河上は経済学を研究するとき，人間像として「全人格的な人間」（ラスキンの whole man）を前提とした。同じ時期に河上の学生であり学友として『貧乏物語』の成立に貢献した櫛田民蔵は，これに対してドイツ経済学，と

11) 河上肇『貧乏物語』弘文堂，1917（大正6）年（末川博監修『河上肇全集』第9巻，岩波書店，1982年，4ページ）。

りわけ，マルクス経済学を研究して「河上の道学者的志向とは一線を画する分析的な経済学研究」の方向に進んでいた[12]。そして，この方法論は，デカルトによって開発された自然科学の研究に適合していたのである。

2　文化経済学と創造性の視点――公共の場づくりによる創造性の開発

文化経済学の成立は第二次大戦後，1960年代の半ばである。創始者とされるW. G. ボウモルは，その著，『舞台芸術――芸術と経済のジレンマ――』(池上惇・渡辺守章監修訳芸団協出版，1993年)[13]において，経済学の中で「芸術文化の創造性」を取り上げて，創造性を開発しうる組織は，利潤目的の営利型組織ではなく，非営利組織であり，社会が非営利組織のために公共的な意思決定によって適切に資源を配分してこそ，創造性を開発する組織，例えば，専属の芸術家を抱える劇場やホールは運営が可能である。しかも，「創造性は多様な外部便益を劇場外の社会にもたらして公共性を高め，社会の福祉水準を向上させる」と主張した。俳優や演奏者の創造的表現を一種の芸術サービスとして経済学研究の対象とし，創造性を確保するためには，非営利組織という新たな経済学のカテゴリーを導入したことは彼らの画期的な業績である。

経済学は，ロバート・オーエンが問題を提起して以来，共同性と個別性の緊張関係や，調整のための，ルールづくりを模索してきた。とりわけ，社会の共有の財産とも言うべき自然，土地，創造的な知識・情報などを，分業や私的所有，市場経済の発展した社会において，いかにして，保全し，有効に開発し，共存を図るべきかは，各国共通の重要な政策課題となった。

現代では，自然や土地に関しては環境経済学が台頭して，産業化など，人類の営みと環境との共存を，経済学の問題として取り上げ，創造的な知識や表現，

12)　山之内靖「解題」(末川博監修『河上肇全集』第9巻，岩波書店，1982年，521ページ)。山之内教授は，河上の方法を「行為の主体的動機を探究して」と述べておられるが，「主体的動機を含めた全人的な存在」をこそ河上は探求したと言うべきであろう。

13)　原題は，W. J. Baumol & W. G. Bowen, *Performing Arts -The Economic Dilemma-*, MIT Press, by the Twentieth Century Fund Inc., The MIT Press, Massachusetts, 1966.（池上惇・渡辺守章監修訳『舞台芸術――芸術と経済のジレンマ――』芸団協出版，1993年)。

情報などの営みを文化経済学が取り上げてきたといえよう。

文化経済学が取り上げてきた人間像は，合理的あるいは経済的人間像ではない。それは，社会とのかかわりをもつ人間像であり，「健康・幸福を視野に入れ倫理や理性にも通じた全人」である。そして，全人が持つ創造力や創造環境を設計する理性的な力量を活かしてこそ，健康や幸福は実現できる。

3 新社会を構想しつつ商品を評価する

創造的な活動が生み出すサービスや人間関係を経済学が取り上げる，という点に注目すると，その原点には，19世紀，イギリスの芸術経済学者，J. ラスキンや，W. モリスにまで，遡ることが出来る。ラスキンは現代の文化経済学の原典に位置する経済学研究者である。彼は，人類の創造的な活動と，その成果が芸術作品から，建築，まちづくり，さらには，社会の改革に発展すると考えた。そして，人類の究極の創造的な作品として「ユートピア」社会を構想し，そのなかで，現実性と神話性との区別を解明しながら一歩一歩，「社会改革の創造活動」へと接近しようと考えたのである。

その意味では，現代の文化経済学者以上の，大きな「社会の創造」を試みたところに，ラスキンと，その後継者，W. モリスらの経済学の特徴があった。その基礎は「労働価値論」の通常の枠組みを根底から問い直したところにある。

A. スミスから J. S. ミルにいたる古典経済学は労働を一般的で抽象的なものに還元して理論化し，同じ労働であっても抽象的な一般的なものと，一般的なものに還元できない「創造的な質」を優先的に取り扱うことをしなかった。また，古典経済学から労働価値説を継承し発展させたマルクスの経済学も，創造的な一般的な労働を解明しようとはしたが果たさず，一般的な労働を基軸として経済学を再構成した。

しかし，社会の現実は，生産にせよ，消費にせよ，分配にせよ，「創造的なもの」がまずあって，ある「型」をつくり，型があってこそ量産ができて一般的なもの，すなわち，労働の一般化が可能となる。この「創造的な質」を解明

した最初の人物がJ. ラスキンであって，彼は，「ムネラ・プルフェリス」で，J. S. ミルの労働価値論を批判して次ぎのように言う。

「本書はイギリスで出版された『ポリティティカル・エコノミー』の諸法則に関する最初の正確な分析を含む，と，私は確信している。……この課題を徹底的に研究することは，実際には，最高度の労働（highest industry），すなわち，普通には，『美術作品（Fine Arts）』と呼ばれるものの生産物の価値を理解できない人間には不可能である。……」[14]

この視点こそ，現代経済学の原点というべきものであろう。

では，「芸術作品の価値を理解できる人間」が構想する「経済学の法則」とは何か。それは，「私的な財」としての商品の価値を評価するときに，一般的な労働の価値とは区別される「固有価値の評価」を導入することである。例えば，固有価値は「絵付けされた皿」のように芸術作品がデザインとして個別の商品の中に入り込んでいる。だが，これは，固有価値の姿の一部であって，絵画としての芸術作品として，その本性を位置づけると，社会全体の人々が共通の資産としている芸術作品，自然（大気や土地・水），コミュニティ（都市，地域等）などのなかに存在している「人々の共同所有下にある財」「万人共有の財」「公有の財」「公共的な財」であることを認識すべきであるというのである。

そして，絵付けの皿の効用は，単に菓子を食べる容器であるということではなくて，それを手にするひとびとは享受能力を教育によって獲得している場合には，人々にコミュニケーションの手がかりを与え，人々の関心を呼び，ウエーバーのいう「文化価値」を通じて，芸術や文化に対する認識を深めてゆく。これは，明らかに，現代で言う厚生，幸福を高める。文化に触れて満足し，しごとに精をだすことが出来るならば人の所得獲得能力は増大する。

---

14) J. Ruskin, *Munera Pulveris, Six Essays on the Elements of Political Economy*, George Allen, London, 1907, Preface, 1871, p. vii,（ジョン・ラスキン，木村正身訳『ムネラ・プルウェリス――政治経済要義論――』関書院，京都，1958年，3ページ。訳文は池上が修正した）。

反対に趣味の悪い食器は人々の品性を貶めるであろう。これは，不幸でありマイナスの幸福である。幸福でない人は生きる力を失うから結局は個人の稼ぐ能力や経済力を衰退させる。

また，固有価値はヴェネチアの聖ロコ教会の破れた天井画，ティントレットの名画のなかにもあるが，市民がその価値を認識せず名画は税金を配分すべき公共的なものであることを知らなければ，世の中に出て「万人共有の公共財産」とはなり得ない。人心は荒廃し地域は衰退する。

これに対して都市や地域社会の「価値」は，このような魅力ある固有価値を発見し，認識して社会の資源の一部を配分して修復し公開すべきであるという。これは，明らかに，地域に固有の「公共財」が存在するし，この公共財のサービスを人々が受け取ることが出来て，幸福になれるという主張を意味していた。

かれらの社会改革の提言は，基本的に，人類の創造的成果，例えば，優れた絵画や保存に値する建築物の公有化であり，美術館をつくり，古い教会の破れた天井画を修復するために市民が税金を負担することであった。また，優れた職人や芸術家が食器の生産や繊維製品の生産に関わり，芸術性の高い皿やカーテンをつくりだして労働者階級の部屋をデザインしなおし，彼らに，芸術に触れて生きる力を回復させることを目指した。職人や芸術家を育てるために税金を投入することを勧め，都市の市民が資金を出し合って農村の衰退する繊維工場を再建するために協同組織をつくるよう訴えてもいる。かれらは，社会を芸術的にデザインするために，人材を社会が育てることや，芸術教育を義務教育から導入して，絵画の試作による観察力や構想力の向上にも提言し実現させている。

4 海外投資の本質

杉原四郎教授の河上肇研究は，河上肇自身の経済学説史研究の方法を厳密に検討された上で，河上が資本主義経済学，人道主義経済学，社会主義経済学という3段階の発展を遂げるという仮説を重視していたことに注目される。同教

授によれば「河上の場合，特徴的なのは，学史が資本主義経済学から社会主義経済学へと移行する場合，その過渡期に『人道主義経済学』があるとされ，その経済学（ないし経済思想）について『資本主義経済学の史的発展』のなかで，J. S. ミル，カーライルおよびラスキンという『ヴィクトリア王朝時代にける英国社会批評家の三個の文星』を中心に論じられていることである。」[15]

本報告では，人道主義経済学から社会主義経済学への発展におけるラスキン経済学の視野の広さに焦点をあわせて研究した。その特徴は，人道主義経済において，市場経済の存在を認め，公共部門を民間公共団体，協同組合や，自治体，政府など，多様な形で把握し，同時に，公共部門における創造的活動をモデルとして，その成果を社会に広げる過程で社会主義経済が誕生してゆくことである。そして，社会の展望においては，『貧乏物語』の結論近くに配置された次の一節が社会主義経済の実現には大きな意味を持つであろう。

「私は此物語の上編に於いて，如何に英国民の大多数が貧乏線以下に沈落して衣食尚せざるの惨状にあるかを述べたが，此等人々の生活必要品を供給するだけでも已に相当な仕事が残っていると言わなければならぬ。然るにも拘らず，最も資本に豊富な世界一の富国たる英国に於いて，其等の仕事が皆放棄されたままに為って居るのは，其等貧乏人の要求に応ずべき事業に放資するよりも，海外未開地の新事業に放資するほうが儲けが多いからである。かくて，世界一の富国たる英国は同時に世界一の貧乏人国として残りつつ，而かも資本の輸出の競争の為に国運を賭してまで戦争しなければならなく為ったのである。」[16]

(2007年11月20日)

15)　杉原四郎『旅人　河上肇』岩波書店，1996年，17ページ。
16)　河上肇『貧乏物語』弘文堂，1917（大正6）年（末川博監修『河上肇全集』第9巻，岩波書店，1982年，115ページ)。

参考文献一覧

馬場啓之助 [1961] 『マーシャル』勁草書房。

Baumol, W. J. [1959] *Business Behavior, Value and Growth*, 1959, revised ed., 1967. (伊達邦春・小野俊夫訳『企業行動と経済成長』東洋経済新報社, 1964年)。

Baumol, W. J. & W. G. Bowen [1966] *Performing Arts -The Economic Dilemma-*, MIT Press, by the Twentieth Century Fund Inc., The MIT Press, Massachusetts. (池上惇・渡辺守章監修訳『舞台芸術——芸術と経済のジレンマ——』芸団協出版, 1993年)。

Baumol, W. [1967] "Macroeconomics of Unbalanced Growth: The Anatomy of Urban Crisis," *American Economic Review*, 57-3, 1967.

Baumol, W. J. [1996] "Children of Performing Arts, The Economic Dilemma: The Climbing Cost of Health Care and Education," *Journal of Cultural Economics*, 20, 1996.

Boulding, K. E. [1992] *Towords New Economics*, Edward Elgar.

Burke, P. [1985] *Vico*, Oxford U. P. (岩倉具忠・岩倉翔子訳『ヴィーコ入門』名古屋大学出版会, 1922年)。

Croce, B. [1913] *The Philosophy of G. Vico*, translated by R. G. Collingwood.

Frey, B. S. and W. W. Pommerehne [1989] *Muse and Market, Explorations in the Economics*, Basil Blackwell.

福原義春・文化資本研究会 [1999] 『文化資本の経営』ダイヤモンド社.

Galbeith, J. K. [1973] *Economics and the Public Purpose*, Houghton Mifflin Co., Boston. (久我豊雄訳『経済学と公共目的』TBS ブリタニカ, 1980年)。

後藤和子 [1998] 『芸術文化の公共政策』勁草書房。

後藤和子編 [2001] 『文化政策学——法・経済・マネジメント』有斐閣。

Harvey, C. and J. Press [1991] *William Morris, Design and Enterprise in Victorian Britain*, Manchester U. P..

——— [1996] *Arts, Enterprise and Ethics, The Life and Works of William Morris*, Frank Cass & Co. Ltd.

端 信行 [1999] 「美術館・博物館の今日的課題」『文化経済学』第1巻第4号, 1999年9月。

早坂 忠 [1971] 「マーシャル経済学形成過程についての若干の覚書」『社会科学紀要』東京大学, 1970・1971年号。

林 敏彦 [1998] 「情報化社会における文化と経済」(池上惇・植木浩・福原義春編『文化経済学』有斐閣)。

Henderson, W. [2000] *John Ruskin's Political Economy*, Routledge.

Hendon, W. S. with N. C. Grant and V. L. Owen, (eds.) [1987] *Economic Efficiency and the Performing Arts*, The University of Akron.

Hendon, W. S. with D. W. Shaw and C. R. Waits [1987] *Artists and Cultural Consumers*, The University of Akron.

Hendon, W. S. with H. Hillman-Chartrand and H. Horowitz [1987] *Paying for the Arts*, The University of Akron.

細川元雄 [1975] 「大正初期河上肇寄贈図書目録」『経済論叢』第116巻第3・4号。

堀田　力 [1998] 「ボランティアの文化経済学」(池上惇・植木浩・福原義春編『文化経済学』有斐閣)。

井口　貢編 [1995] 『文化現象としての経済－現代経済の諸相』学術図書出版。

池上　惇 [1987] 「社会の共同資産と財政学――A. スミスにおける common stock 概念を中心として」『経済論叢』第140巻1・2号，1987年7・8月。

――― [1990] 『財政学――現代財政システムの総合的解明』岩波書店。

――― [1991] 『文化経済学のすすめ』丸善。(韓国語訳は，姜応善訳，毎日経済新聞社，1996年)。

――― [1993] 『ラスキン・モリスと現代』丸善。

――― [1996] 『情報社会の文化経済学』丸善。

――― [1996] 『現代経済学と公共政策』青木書店。

――― [1999] 『財政思想史』有斐閣。

――― [2000] 「書評・福原義春他『文化資本の経営』ダイヤモンド社，1999」『文化経済学』第2巻第1号，2000年3月。

――― [2000] 『日本財政論』実教出版。

――― [2001] 「文化産業の発展」(後藤和子編『文化政策学――法・経済・マネジメント』有斐閣，2001年)。

――― [2003] 『文化と固有価値の経済学』岩波書店。

池上　惇編 [1991] 『文化経済学の可能性』芸団協出版部。

Ikegami, J. [1992] "Economics of Intrinsic Value-A Note on the Value Theory of J. Ruskin and A. Sen," *The Kyoto University Economic Review*, Vol. LXII, No. 1, Whole No. 132, April.

――― [1999] "Music Festival and Financial Source in Creative Cities" in *Proceedings-Actes, Vol. 1, 5th International Conference on Arts and Cultural Management*, eds. by L. Uusitalo & J. Moisander, Helsinki, June 13-17.

――― [2000] "Value of Culture and Creative City Planning in Urban Areas," *Korean Association for Cultural Economics*, Cultural Industries in the Informa-

tion Age, Seoul International Conference, 27/10/2000.

池上 惇・植木 浩・福原義春編 [1998] 『文化経済学』有斐閣。(韓国語訳は，趙相浩訳，世界出版，1999年)。

池上 惇・小暮宣雄・大和滋編 [2000] 『現代のまちづくり——地域固有の創造環境を』丸善。

池上 惇・中谷武雄 [2004] 『知的所有と文化経済学』実教出版。

池上 惇・堀田 力・福原義春・端 信行編 [2001] 『文化政策入門——文化の風が社会を変える』丸善。

池上 惇・山田浩之編 [1993] 『文化経済学を学ぶ人のために』世界思想社。

Ikegami, J. and K. Gotoh [2000] *Value of Culture and Intrinsic Value Theory in Economics -On Excellent Idea on Value by A. Smith-*, The Paper presented for Amsterdam-Maastricht Summer University 2000, Amsterdam, 31 July-9 August, 2000.

Jensen, H. E. [1983] "Keynes as Marshallian," *Journal of Economic Issues*, Vol. XVII, No. 1, March.

河上 肇 [1917] 『貧乏物語』弘文堂。(末川博監修『河上肇全集』第9巻，岩波書店，1982年)。

——— [1918] 「ラスキンの『此最後の者にも』」『経済論叢』第6巻第4号，大正7年4月。(末川博監修『河上肇全集』第9巻，岩波書店，1982年，158ページ以下)。

——— [1923] 『資本主義経済学の史的発展』弘文堂。(末川博監修『河上肇全集』第13巻，岩波書店，1982年)。

Keynes, J. M. [1919-1946] *Essays in Biography, The Collected Writings of John Maynard Keynes*, Vol. X, 1972. (大野忠男訳『人物評伝』ケインズ全集10，東洋経済新報社，1980年)。

木田 宏 [2000] 「芸術文化の振興と人材の育成」『文化経済学』第2巻第1号，2000年3月。

菊地裕幸 [2002] 「租税改革における効率と公正」『現代思想』Vol. 30-15, 2002年12月。

木村正身 [1958] 「ジョン・ラスキン『ムネラ・プルウェリス——政治経済要義論——』訳者まえがき」(ジョン・ラスキン，木村正身訳『ムネラ・プルウェリス——政治経済要義論——』関書院)。

——— [1982] 「河上肇とラスキン」『河上肇全集』第13巻月報3，岩波書店。

Kimura, M. [1977] *A Bibliography of Ruskin Studies in Japan*, The Ruskin Association, Bembridge,.

北村裕明［1996］「公益団体の財政分析――日英比較を中心に」『彦根論叢』第299号。

Klamer, A. and D. N. McClosky［1988］ "Economics in the Human Conversation" in *The Consequences of Economic Rhetoric*, eds. by A. Klamer, D. N. McClosky and R. M. Solow, Cambridge U. P..

Klamer, A. (ed.)［1996］ *The Value of Culture*, Amsterdam U. P..

Kurabayashi, Y. and Y. Matsuda［1987］ "Economic and Social Aspects of the Orchestra Audience in Japan" in *The Economic Efficiency and the Performing Arts*, eds. by N. C. Grant, W. S. Hendon & V. L. Owen, Association for Cultural Economics, 1987.

Kurabayashi, Y. and Y. Matsuda (eds.)［1988］ *Economic and Social Aspects of the Performing Arts in Japan : Symphony Orchestra and Opera*, Kinokuniya-shoten.

倉林義正［1998］「文化経済学会〈日本〉の歩み：研究の現状と動向」『文化経済学』第1巻第1号，1998年5月。

小林真理［1998］「文化法研究の視座――『文化基本法』の原則」『文化経済学』第1巻第2号，1998年10月。

Keynes, J. M.［1924］ "Alfred Marshall" in *Essays in Biography, The Collected Writings of John Maynard Keynes*, Vol. X, 1972.（大野忠男訳『人物評伝』ケインズ全集10，東洋経済新報社，1980年）。

Marshall, A.［1881］ *The Economics of Industry*, 2nd ed., London, Macmillan. (with Mary Paley Marshall).

――――［1885］ "Paper to the Industrial Remuneration Conference" in Industrial Remuneration Conference, *The Report of the Proceedings and Papers*, London, Cassell.

――――［1890］ *Principles of Economics*, 1st ed., 1890, 8th ed., 1920, Rep., 1952, 9th (Variorum) ed., with annotations by C. W. Guillebaud, 2 vols., London, Macmillan, 1961.（馬場啓之助訳『マーシャル経済学原理』東洋経済新報社，Ⅰ-Ⅵ，1965-1967年。永澤越郎訳『経済学原理』全4冊，岩波ブックセンター信山社，1985年）。

諸富　徹［2000］『環境税の理論と実際』有斐閣。

――――［2002］「金融のグローバル化とトービン税」『現代思想』Vol. 30-15, 2002年12月。

Morris, W.［1877］ "The Lesser Arts, delivered before the Trader's Guild of Learning" in *The Collected Works of William Morris with Introduction his Daughter May Morris*, Vol. XXII, Dec. 4, 1877, Hopes and Fears for Art, Lectures on Art and Industry, Longmans Green and Company, 1915.

Morris, W. [1996] *The William Morris Library*, Second Series Six-volume set, Thoemmes Press.

Mumford, L. [1938] *The Culture of Cities*, Harcout Brace Javanovich Inc.. (生田勉訳『都市の文化』鹿島出版会, 1974年)。

内藤史朗 [1999] 「『芸術教育論』(ラスキン原著) の復刻再版にあたって」(ジョン・ラスキン, 内藤史朗訳『芸術教育論』明治図書)。

――― [2000] 「『ラスキンの芸術教育』訳者序文」(ジョン・ラスキン, 内藤史朗訳『ラスキンの芸術教育――描画への招待』明治図書)。

――― [2002] 「『風景の思想とモラル――近代画家論・風景編』訳者あとがき――ラスキンをこれからも読むために――」(ジョン・ラスキン, 内藤史朗訳『Modern Painters 風景の思想とモラル――近代画家論・風景編――』法藏館)。

中谷武雄 [1996] 『スミス経済学の国家と財政』ナカニシヤ書店。

西岡幹雄 [1997] 『マーシャル研究』晃洋書房。

小野二郎 [1992] 『ウィリアム・モリス――ラディカル・デザインの思想』中央公論社。

Peacock, A. T. [1975-1977] "The Treatment of the Principles of Public Finance in The Wealth of Nations" in *Essays on Adam Smith*, Part I, II, eds. by A. Skinner and T. Wilson, Oxford at the Clarendon Press.

Peacock, A. T. and J. Wiseman [1961] *The Growth of Public Expenditures in the U. K.*, Princeton University Press, and Oxford, Oxford University Press, Revised edition, London, Allen and Unwin, 1967.

Peacock, A. T. and R. Weir [1975] *The Composer in the Market Place*, Feber Music, London.

Peacock, A. T. [1992] "Economics, Cultural Values and Cultural Policies" in *Cultural Economics*, eds. by R. Towse and A. Khakee, Springer-Verlag, Berlin, 1992.

――― [1992] *Public Choice Analysis in Historical Perspectives*, Cambridge University Press.

――― [1993] *Paying the Piper, Culture, Music and Money*, Glasgow U. P.

Pigou, A. C. (ed.) [1925] *Memorials of Alfred Marshall*, London, Macmillan. (宮島綱男訳『マーシャル経済学論集』寶文館, 1928年)。

Rawls, J. [1971] *A Theory of Justice*, The Belknap Press of Harvard University Press, (矢島鈞次監修訳『正議論』紀伊国屋書店, 1979年)。

ロールズ, ジョン, 田中成明編訳 [1979] 『公正としての正義』木鐸社。(本書は, 田中教授の編集による原著者8論文の翻訳である)。

ラスキン, ジョン, 内藤史朗訳 [2002] 『Modern Painters 風景の思想とモラル――

近代画家論・風景編――』法藏館。

Ruskin, J. [1857, 1880] "A Joy for Ever," (and Its Price in the Market): being the Substance (with additions) of Two Lectures on The Political Economy of Art, Delivered at Manchester, July 10th and 13th, 1857 in E. T. Cook and A. Wedderburn eds., *The Works of John Ruskin, "A Joy for Ever," and The Two Path with Letters on The Oxford Museum and Various Adresses, 1856-1860*, George Allen, London, Longmans & Green, New York, 1905. (内藤史朗訳「芸術経済論」(梅根悟・勝田守一監修『世界教育学選集，芸術教育論』三，明治図書，1969年)。

――― [1862, 1863] "Munera Pulveris", in *The Works of John Ruskin, Unto This Last, Munera Pulveris, Time and Tide with Other Writings on Political Economy, 1860-1873*, eds. by E. T. Cook and A. Wedderburn, George Allen, London, Longmans & Green, New York, 1905. (ジョン・ラスキン，木村正身訳『ムネラ・プルウェリス――政治経済要義論――』関書院，京都，1958年。Unto This Last の日本語訳は，飯塚一郎訳「この最後の者にも」責任編集，五島茂『ラスキン，モリス』世界の名著52，中央公論社，1979年。Time and Tide の日本語訳は，栗原古城訳『時と潮』玄黄社，1918年)。

――― [1994] *The Social and Economic Works of John Ruskin*, 6 Volumes, Routledge/Thoemmes Press.

阪本　崇 [1998]「書評・Towse, R. (1997) *Baumol's Cost Disease: The Arts and other Victims*, Edward Elgar.」『文化経済学』第1巻第2号，1998年10月。

佐々木雅幸 [1997]『創造都市の経済学』勁草書房。

――― [2001]『創造都市への挑戦』岩波書店。

Schorske, C. E. [1961] *Fin- de- siècle Vienna, Politics and Culture*, Knopf Inc., New York. (安井琢磨訳『世紀末ウィーン』岩波書店，1961年)。

Sen, A. [1982] "Rational Fools: A Critique if the Behavioural Foundations of Economic Theory" in *Choice, Welfare and measurement*, ed. by A. Sen, Harvard U. P.. (大庭健・川本隆史訳「合理的な愚か者――経済理論における行動理論的な基礎への批判」『合理的な愚か者――経済学＝倫理学的研究』勁草書房，1989年)。

――― [1985] *Commodities and Capabilities*, North-Holland. (鈴村興太郎訳『福祉の経済学――財と潜在能力』岩波書店，1988年)。

Sen, A. and M. C. Nussbaum, (eds.) [1993] *The Quality of Life*, Clarendon Press, Oxford.

Sidgwick, H. [1901] *The Principles of Political Economy*, 3rd ed., Macmillan, Lon-

don, in *The Works of Henry Sidgwick*, Thoemmes, 1996.

Smith, A. [1776] *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, Vol. 1*, General Editors R. H. Campbell and A. S. Skinner, Textual Editor W. B. Todd, Clarendon Press, Oxford, 1976, ditto, *Vol. II*, 1976. (邦訳は，キャナン版，6版，1950年版を基礎とした大河内一男監修訳『国富論』中央公論社，1986年，現在は中公文庫に収められている。また同様の版を基礎にして各邦訳を参照した改訳版は，大内兵衛，松川七郎訳『諸国民の富』岩波書店，第1-4分冊，1959-1966年。水田洋訳『国富論』河出書房新社，1965年。竹内謙二訳『国富論』東京大学出版会，1969年)。

――― [1723] *Lectures on Jurisprudence*, ed. by R. L. Meek, D. D. Raphael and P. G. Stein, 1978. (高島善哉・水田洋訳『グラスゴウ大学講義』日本評論社，1947年。1896年にキャナンが編集したもの。筆記者による講義録が基礎とされる)。

――― [1795] *Essays on Philosophical Subjects*, ed. by W. P. D. Wightman and J. C. Bryce with Dugald Stewart's Account of Adam Smith, ed. by I. S. Ross, General Editors D. D. Raphael and A. S. Skinner, Clarendon Press, Oxford, 1980. (アダム・スミスの会監修，水田洋ほか訳『アダム・スミス哲学論文集』名古屋大学出版会，1993年。同書は，1795年初版本と，1755，1756年における『エディンバラ評論』への寄稿論文，W. ハミルトン詩集への序文を原典によって和訳したもの)。

Smith, Adam [1759] *The Theory of Moral Sentiments*, ed. by D. D. Raphael and A. L. Macfie, Clarendon Press, Oxford, 1976. (米林富男訳『道徳情操論（上），(下)』未来社，1969-1970年)。

Stansky, P. [1996] *Redesigning the World, William Morris, the 1880s, and the Arts and Crafts*, SPOSS.

杉原四郎・一海知義 [1979-1986] 『河上肇』全3巻，新評論。

杉原四郎 [1980] 『日本経済思想史論集』未来社。

杉原四郎編 [1987] 『河上肇評論集』岩波文庫。

杉原四郎 [1996] 『旅人 河上肇』岩波書店。

住谷悦治 [1962] 『河上肇』吉川弘文館。

住谷一彦 [2006] 「河上肇と比較経済思想――河上肇におけるヴェーバー的問題――」『経済論叢』第176巻第5・6号。

鈴木 茂 [1998] 『産業文化都市の構造』大明堂。

高島 博 [1999] 『地域づくりの文化創造力――日本型フィランソロピーの活用』JDC。

田中敬文・永山貞則［1999］「芸術文化と NPO」『文化経済学』第1巻第4号，1999年9月。

寺西俊一・石　弘光［2002］「環境保全のための公共政策——新たな構築を目指して」(寺西俊一・石弘光編『環境保全と公共政策』岩波書店)。

Towse, R. [1997] *Cultural Economics: The Arts, Heritage and The Media Industries*, I, II, Edward Elgar.

——— (eds.) [1997] *Baumol's Cost Desease: The Arts and other Victims*, Edward Elgar.

——— [1999] "Artists' Earnings from Copyright and Related Rights,"『文化経済学』第1巻第3号，1999年3月。

Throsby, D. [1994] "Production and Consumption of the Arts: A View of Cultural Economics," *Journal of Economic Literature*.

——— [1998] "Research Directions and Recent Developments in Cultural Economics,"『文化経済学』第1巻第1号，1998年5月。

——— [2001] *Economics and Culture*, Cambridge U. P..

都留重人［1998］『科学的ヒューマニズムを求めて』新日本出版社。

露木紀夫［2001］「西暦2000年の日本のラスキン」(野に咲くオリーブの会『1900年1月20日』横浜)。

植木　浩［1998］「文化政策の展開」(池上惇・植木浩・福原義春編『文化経済学』有斐閣)。

上村忠男［1986］『クローチェ政治哲学論集』法政大学出版局。

——— [1988]『ヴィーコの懐疑』みすず書房。

植田和弘［1992］『廃棄物とリサイクルの経済学——大量廃棄社会は変えられるか』有斐閣。

——— [1996]『環境経済学』岩波書店。

——— [2002]「環境政策と行財政システム」(寺西俊一・石弘光編『環境保全と公共政策』岩波書店)。

ウォード，M. A.，露木紀夫監修訳［1999］『カーライル・ラスキン・トルストイ』ぱる出版。

梅棹忠夫監修［1983］『文化経済学事始め』学陽書房。

Watanabe, M. [1999] "Arts Management and Dilemmas in Cultural Policy" in *Proceedings-Actes, Vol. 2, 5th International Conference on Arts and Cultural Management*, eds. by L. Uusitalo & J. Moisander, Helsinki, June 13-17, 1999.

Wiener, N. [1950] *The Human Use of Human Beings, Cybernetics and Society*, Houghton Mifflin & Co.

八木紀一郎［2006］「河上肇記念講演会」『経済論叢』第176巻第5・6号。
山田浩之［1998］「文化産業論」(池上惇・植木浩・福原義春編『文化経済学』有斐閣)。
山田浩之・新井益宏・安田秀穂［1998］「文化支出の経済効果」『文化経済学』第1巻第2号，1998年10月。